

方言データから見たアスペクト形式の派生機能

鴨井 修平

同志社大学文化情報学研究科博士後期課程

要旨

日本語方言におけるアスペクト研究では、西日本諸方言において非結果相と結果相の対立を形態的に区別する YORU と TORU のアスペクト機能が注目され続けている。命題の時間構造において YORU は主に進行相(progressive), TORU は主に結果相(resultative)を表すアスペクト機能を有しているが、近年では両形式が進行相のアスペクトを表す機能的重複が通方言的に観察されており、アスペクトの観点から両者を区別することが困難になっている。本研究では、YORU と TORU が目撃性の有無によって対立する神戸市東灘区方言や丁寧さの有無によって対立する岡山県備前方言のデータより、アスペクトを担う両形式がモダリティの意味も標示し得るという事実を報告する。さらに、神戸市東灘区方言、岡山県備前方言、高知県土佐方言という 3 つの方言データの比較対照より、YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立するということを提案し、アスペクトとモダリティの間の相関関係について考察する。

1. 問題提起

西日本諸方言におけるアスペクト研究では、従来、命題の時間構造において非結果相(将然相(prospective), 進行相(progressive))を担う YORU(-yor-)と結果相(resultative)を担う TORU(-tor-)のアスペクト対立に関する研究が盛んに行われてきた。YORU は動詞連用形, TORU は動詞テ形にそれぞれ存在動詞オル(-or-)が結合して形成された形式であるということが通説とされている。しかし、両形式が進行相のアスペクトを表す現象(機能的重複)が通方言的に生じているため、近年では、YORU は将然相, 進行相, TORU は進行相, 結果相を担うという事実を前提に、両形式の対立に関する議論が進められている (cf. 工藤 2014, 津田 2016)。

これと並行して、(1)に示すように、大阪方言(1a)では YORU が卑罵的態度 (井上 1998), 福岡市方言(1b)では YORU が意外性 (平塚 2008) を標示するアスペクト以外の意味機能 (モダリティ機能) を有するという報告もある。

- (1) a. めし食いよる。(仕事もしないくせに飯ばかり食ってやがるという不満)
b. どこ行きよると? お金ないくせに。(お金ないのに行ってきたの? という驚き)

対して、(2)に示すように、岡山方言には TORU が丁寧さを標示するモダリティ機能を有するという事実もある (cf. 鴨井 2017)。

- (2) [運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]
a. 太郎, 走りよる (親しい友人等に対しては配慮しないという態度)
b. 太郎, 走っとる (転校生等に対しては配慮するという態度)

ここで、[1] YORU と TORU のモダリティ機能の成立条件は何か、[2] 両形式はモダリティ上において対立しているのか、という 2 つの問題が生じる。

本研究では、神戸市東灘区方言、岡山県備前方言、高知県土佐方言のデータを中心とした分析より次のことを提案し、YORU と TORU が担うアスペクトとモダリティの間の相関関係について考察する。

- (3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。

2. アスペクト機能とモダリティ機能について

本研究では、「走る」、「食べる」などの継続性を持つ動詞を伴う命題の時間構造(t=time)は 4 つの臨界点(sb=signal of beginning_開始兆候, b=beginning_開始, e=ending_終了, re=result

ending_結果終了)と、3つの局面(将然相, 進行相, 結果相)からなると考える(図1)。また、「死ぬ」、「消える」などの継続性を持たない動詞を伴う命題の時間構造は3つの臨界点(sb, b/e, re)と2つの局面(将然相, 進行相)からなると考える(図2)。YORUとTORUのアスペクト機能とは、これら2種類の命題の時間構造において各形式が担うアスペクトを標示する意味機能のことである。

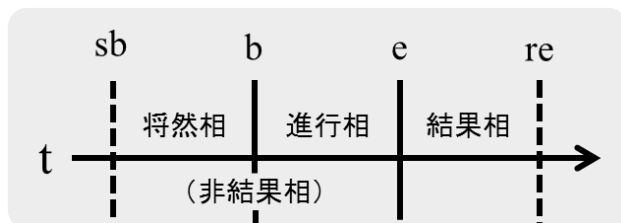


図1



図2

また本研究では、(1), (2)に示したような卑罵的態度, 意外性, 丁寧さは、いずれも話し手の主観的・心理的な判断・態度の標示という意味でモダリティと呼んでおく。YORUとTORUのモダリティ機能とは、各形式が担うモダリティを標示する意味機能のことである。

3. 神戸市東灘区方言のデータ

本節では、(3)YORUとTORUにアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という提案の根拠として、YORU(よー)とTORU(とー)のアスペクト機能が重複する場合には目撃性の有無におけるモダリティ対立が生じるが、両形式のアスペクト機能が重複しない場合にはモダリティ対立は生じないという現象を示す神戸市東灘区方言のデータを提示する。

3.1. YORUとTORUのアスペクト機能

YORUとTORUのアスペクト機能に関して、若年層(18-39歳)の母語話者5名を対象に行った調査の結果は次の通りである。まず(4)に示すように、継続性を持たない動詞を伴う命題に生起する場合、YORUは将然相、TORUは結果相を標示するという意味で、両形式のアスペクト機能は対立する。

(4) a. [PROSP: 廊下を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた]

ネズミが 死によー/*死んどー。(5/5)

b. [RES: 廊下を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた]

ネズミが 死んどー/*死によー。(5/5)

(4)のようなアスペクト対立は、他に「消える」、「点く」のような継続性を持たない動詞を伴う命題においても同様に生じる。

次に(5)に示すように、継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合、YORUとTORUは共に進行相を標示するという意味で、両形式のアスペクト機能は重複する。

(5) [PROG: 運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]

太郎, 走りよー/走っとー。(5/5)

(5)のような機能的重複は、他に「食べる」、「焼く」のような継続性を持つ動詞を伴う命題においても同様に生じる。また(6)に示すように、継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合、YORUは将然相、TORUは結果相も標示するが、将然相と結果相においては両形式のアスペクト機能は対立する。

(6) a. [PROSP: 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、走る直前の太郎がいた]

太郎, 走りよー/*走っとー。(5/5)

b. [RES: 運動場へ行くと、既に10周走り終えた太郎がいた]

太郎, 走っとー/*走りよー。(5/5)

(6)のようなアスペクト対立は、他に「食べる」、「焼く」のような継続性を持つ動詞を伴う命題においても同様に生じる。

3.2. YORU と TORU のモダリティ機能

YORU と TORU のモダリティ機能に関して、若年層（18-39 歳）の母語話者 5 名を対象に行った調査の結果は次の通りである。まず(7)に示すように、進行相のアスペクト上において YORU と TORU の機能的重複が生じる場合、YORU は [-目撃]、TORU は [+目撃] を標示するという意味で、モダリティ対立が成立する。

(7) [PROG: 運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]

- a. (走っている最中の太郎がよく見えない場合) 太郎、走りよー/?走っとー。(5/5)
- b. (走っている最中の太郎がよく見える場合) 太郎、走っとー/?走りよー。(5/5)

(7a)は、話し手の目撃の度合いが低く、命題内容を詳細に把握できない場合においては YORU の方が選択されやすいことを示しており、(7b)は、話し手の目撃の度合いが高く、命題内容を詳細に把握できる場合においては TORU の方が選択されやすいことを示している。よって、目撃性を標示するという意味において YORU は無標、TORU は有標の形式である。(7)のようなモダリティ対立は、他に「食べる」、「焼く」のような継続性を持つ動詞を伴う命題においても同様に生じる。

しかし(8)に示すように、将然相のアスペクト上において YORU と TORU の機能的重複が生じない場合、目撃性の有無におけるモダリティ対立は成立しない。

(8) [PROSP: 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、走る直前の太郎がいた]

- a. (走る直前の太郎がよく見えない場合) 太郎、走りよー/*走っとー。(5/5)
- b. (走る直前の太郎がよく見える場合) 太郎、走りよー/*走っとー。(5/5)

同様に、(9)に示すように、結果相のアスペクト上において YORU と TORU の機能的重複が生じない場合、目撃性の有無におけるモダリティ対立は成立しない。

(9) [RES: 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた太郎がいた]

- a. (走り終えた太郎がよく見えない場合) 太郎、走っとー/*走りよー。(5/5)
- b. (走り終えた太郎がよく見える場合) 太郎、走っとー/*走りよー。(5/5)

さらに、継続性を持たない動詞を伴う命題においても、YORU と TORU の目撃性の有無におけるモダリティ対立は生じていないが、これは、両形式にアスペクト上における機能的重複が生じていないため、当然の帰結であると言える。

以上の神戸市東灘区方言のデータは、(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という本研究の提案を支持している。しかし、前述の神戸市東灘区方言におけるデータはすべて若年層のものである。今後、中年層（40-69 歳）、高年層（70 歳以上）の方言データを網羅的に獲得した上で、さらに通時的視点から分析を行うことが課題である。

4. 岡山県備前方言のデータ

本節では、(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という提案の根拠として、YORU（よーる）と TORU（とる）のアスペクト機能が重複する場合には丁寧さの有無におけるモダリティ対立が生じるが、両形式のアスペクト機能が重複しない場合にはモダリティ対立は生じないという現象を示す岡山県備前方言のデータを提示する。

4.1. YORU と TORU のアスペクト機能

YORU と TORU のアスペクト機能に関して、若年層（18-39 歳）の母語話者 10 名を対象に行った調査の結果は次の通りである。まず(10)に示すように、継続性を持たない動詞を伴う命題に生起する場合、YORU は将然相、TORU は結果相を標示するという意味で、両形式のアスペクト機能は対立する。

(10) a. [PROSP: 廊下を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた]

ネズミが 死にょーる/*死んだる。(10/10)

b. [RES: 廊下を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた]

ネズミが 死んだる/*死にょーる。(10/10)

(10)のようなアスペクト対立は、「消える」、「点く」のような継続性を持たない動詞を伴う命題においても同様に生じる。

次に(11), (12)に示すように, 継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合, YORU と TORU は共に進行相, 将然相を標示するという意味で, 両形式のアスペクト機能は重複する。

(11) [PROG: 運動場へ行くと, 走っている最中の太郎がいた]

太郎, 走りょーる/走っとる。(10/10)

(12) [PROSP: 運動場へ行くと, スタートラインに立ち, 走る直前の太郎がいた]

太郎, 走りょーる/走っとる。(YORU:10/10, TORU:6/10)

(11), (12)において生じている YORU と TORU の生起の揺れを表 1 に示す。

表 1 進行相 (上)・将然相 (下) における調査結果

動詞	YORU	TORU	YORU/TORU	その他	話者数
走る	0	0	10	0	10
食べる	2	0	8	0	10
焼く	1	0	9	0	10

動詞	YORU	TORU	YORU/TORU	その他	話者数
走る	4	0	6	0	10
食べる	2	0	8	0	10
焼く	3	0	7	0	10

また(13)に示すように, 継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合, TORU は結果相も標示するが, 結果相においては両形式のアスペクト機能は対立する。

(13) [RES: 運動場へ行くと, 既に 10 周走り終えた太郎がいた]

太郎, 走っとる/*走りょーる。(10/10)

(13)のようなアスペクト対立は, 「食べる」, 「焼く」のような継続性を持つ動詞を伴う命題においても同様に生じる。

前述のデータは全て若年層のものであるが, 中年層 (40-69 歳), 高年層 (70 歳以上) ではどうだろうか。両者の母語話者各 10 名を対象に調査を行った結果, 中年層では若年層と同じ傾向のデータが得られた。しかし(14)に示すように, 高年層では YORU と TORU の進行相, 将然相のアスペクト上における機能的重複はほとんど観察されなかった。

(14) a. [PROG: 運動場へ行くと, 走っている最中の太郎がいた]

太郎, 走りょーる/?走っとる。(YORU:10/10, TORU:2/10)

b. [PROSP: 運動場へ行くと, スタートラインに立ち, 走る直前の太郎がいた]

太郎, 走りょーる/*走っとる。(10/10)

4. 2. YORU と TORU のモダリティ機能

YORU と TORU のモダリティ機能に関して, 若年層 (18-39 歳) の母語話者 10 名を対象に行った調査の結果は次の通りである。まず(15)に示すように, 進行相のアスペクト上において YORU と TORU の機能的重複が生じる場合, YORU は [-丁寧], TORU は [+丁寧] を標示するという意味で, モダリティ対立が成立する。ここでは代表して進行相におけるデータのみ提示するが, 将然相においても同様の調査結果である。

(15) [PROG: 運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]

- a. (親しい友人に対して、特に配慮しない場合) 太郎、走りよーる/?走っとる。
- b. (転校生に対して、特に配慮する場合) 太郎、走っとる/?走りよーる。

(15a)は、話し手の配慮が必要でない相手が聞き手である場合においては YORU が選択されやすいことを示しており、(15b)は、話し手の配慮が必要である相手が聞き手である場合においては TORU が選択されやすいことを示している。よって、丁寧さを標示するという意味において YORU は無標、TORU は有標の形式である。(15)のようなモダリティ対立は、他に「食べる」、「焼く」のような継続性を持つ動詞を伴う命題においても同様に生じる。進行相のアスペクト上において、YORU と TORU の生起に揺れが生じている表 1 と対照的に、(15)において生じている YORU と TORU のモダリティ対立を表 2 に示す。

表 2 -丁寧(上)・+丁寧(下)における調査結果

動詞	YORU	TORU	YORU/TORU	その他	話者数
走る	10	0	0	0	10
食べる	10	0	0	0	10
焼く	10	0	0	0	10

動詞	YORU	TORU	YORU/TORU	その他	話者数
走る	0	10	0	0	10
食べる	0	10	0	0	10
焼く	0	10	0	0	10

しかし(16)に示すように、結果相のアスペクト上において YORU と TORU の機能的重複が生じない場合、丁寧さの有無におけるモダリティ対立は成立しない。

(16) [RES: 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた太郎がいた]

- a. (親しい友人に対して、特に配慮しない場合) 太郎、走っとる/*走りよーる。(10/10)
- b. (転校生に対して、特に配慮する場合) 太郎、走っとる/*走りよーる。(10/10)

さらに、継続性を持たない動詞を伴う命題においても、YORU と TORU の丁寧さの有無におけるモダリティ対立は生じていないが、これは、両形式にアスペクト上における機能的重複が生じていないため、当然の帰結であると言える。

以上の岡山県備前方言のデータは、(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という本研究の提案を支持している。また、前述のデータは全て若年層のものであるが、中年層(40-69 歳)、高年層(70 歳以上)ではどうだろうか。両者の母語話者各 10 名を対象に調査を行った結果、中年層では若年層とほぼ同じ傾向のデータが得られた。しかし(17)に示すように、高年層では YORU と TORU のモダリティ上における対立は観察されなかった。

(17) [PROG: 運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]

- a. (親しい友人に対して、特に配慮しない場合) 太郎、走りよーる/?走っとる。(10/10)
- b. (初対面の大人に対して、特に配慮する場合) 太郎、走りよーる/?走っとる。(10/10)

この事実もまた、本研究の提案(3)を支持している。

5. 高知県土佐方言のデータ

本節では、(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という提案の根拠として、YORU (ゆう) と TORU (ちゅう) のアスペクト機能が重複しておらず、モダリティ機能も観察されない高知県土佐方言のデータを提示する。

5. 1. YORU と TORU のアスペクト機能

YORU と TORU のアスペクト機能に関して、若年層（18-39 歳）の母語話者 10 名を対象に行った調査の結果は次の通りである。まず(18)に示すように、継続性を持たない動詞を伴う命題に生起する場合、YORU は将然相、TORU は結果相を標示するという意味で、両形式のアスペクト機能は対立する。

(18) a. [PROSP: 廊下を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた]

ネズミが 死にゆう/*死んじゅう。(10/10)

b. [RES: 廊下を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた]

ネズミが 死んじゅう/*死にゆう。(10/10)

次に(19)に示すように、継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合、YORU は進行相、TORU は結果相を標示するという意味で、両形式のアスペクト機能は対立する。

(19) a. [PROG: 運動場へ行くと、走っている最中の太郎がいた]

太郎、走りゆう/*走っちゅう。(10/10)

b. [RES: 運動場へ行くと、既に 10 周走り終えた太郎がいた]

太郎、走っちゅう/*走りゆう。(10/10)

また(20)に示すように、継続性を持つ動詞を伴う命題に生起する場合、将然相においても両形式のアスペクト機能は対立するが、YORU の生起には多少の揺れが生じている。

(20) [PROSP: 運動場へ行くと、スタートラインに立ち、走る直前の太郎がいた]

太郎、走りゆう/*走っちゅう。(7/10)

(20)において生じている YORU の生起の揺れを表 3 に示す。

表 3 将然相における調査結果

動詞	YORU	TORU	YORU/TORU	その他	話者数
走る	7	0	0	3	10
食べる	9	0	0	1	10
焼く	9	0	0	1	10

高知県土佐方言では、前述の神戸市東灘区方言、岡山県備前方言とは異なり、将然相、進行相、結果相のいずれのアスペクト上においても、YORU と TORU の機能的重複は生じていない。また、目撃性の有無や丁寧さの有無のようなモダリティ上における対立も観察されなかった。

以上の高知県土佐方言のデータは、(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。という本研究の提案を支持している。また、前述のデータは全て若年層のものであるが、中年層（40-69 歳）、高年層（70 歳以上）ではどうだろうか。両者の母語話者各 5 名を対象に調査を行った結果、中年層、高年層ともにほぼ同じ傾向のデータが得られた。当然両者では、YORU と TORU のモダリティ上における対立も観察されなかった。この事実もまた、(3)の本提案を支持している。

6. 結論と考察

以上 3 つの方言データが示す事実より、改めて(3) YORU と TORU にアスペクト上の機能的重複が生じる場合のみ、モダリティ上における対立が成立する。ということを提案する。またこの事実より、YORU と TORU の有するモダリティ機能は元来から備わっていたものではなく、両形式の基底の意味機能であるアスペクト機能から派生的に生じた意味機能であるということが考えられる。

そして、両形式のアスペクト上における機能的重複とモダリティ上における対立の間の相関関係については、言語経済(Martinet 1962)の観点より、次のようなことが考えられる。西日本諸方言における YORU と TORU は、2 つの形式が同じ 1 つの意味機能を担おうとす

るとき、①新たに意味を生じさせることで2つの形式を保持する。②一方の形式を破棄し、もう一方の形式に意味を統合する。という節約性に従ったために、新たにモダリティ機能を生じさせ、両形式を保持しているのではないだろうか。

しかし、アスペクトという時間的な意味から、なぜ卑罵、丁寧さ、目撃性、意外性などの多様なモダリティの意味が生じるのかという意味派生の間の相関関係や、YORU と TORU のいずれもがモダリティ上の有標形式になり得る可能性を秘めていることについては未開拓の研究課題である。今後は網羅的に方言データを収集し、両形式のアスペクトとモダリティを体系的に記述するとともに、これらの課題を解決していくつもりである。

略号

PROG: 進行相, PROSP: 将然相, RES: 結果相

参考文献

- 平塚雄亮 (2008) 「福岡市方言におけるアスペクトマーカではないヨルの用法について」
『阪大社会言語学研究ノート』 8, pp.101-115.
- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』 東京：秋山書店.
- 鴨井修平 (2017) 「方言データから見る持続形式の意味拡張－岡山方言を中心に－」 同志社大学文化情報学研究科修士論文.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 東京：ひつじ書房.
- Martinet, André (1962) *A Functional View of Language*. Oxford: Clarendon Press.
- 津田智史 (2016) 『方言アスペクト研究の新たな視点』 科学研究費成果報告書.